

幼児前期の社会性の発達



丹 羽 淑 子

幼児前期の社会性の発達を考察するにあたって、この年令段階においてはいかなる社会関係の発展があるか、子どもにとってその対象はどのように拡大され、またそれに対してどのような様式をもってこたえているか、それらの社会行動はその後展開する社会生活の上に、また、子ども自身の人格形成の機能の上にならざる意味をもつかの諸点を、発達の進行方向にむかって検討しようとおもう。

研究方法について

乳児期の社会性の発達に関する研究方法は長期的直接観察によって進行的にとらえられ、記述され、更に子どもと環境との一定の関係を明らかにするという大切な目的をもって、代表的な情動的表出が実験によって横断的にたしかめられた。幼児前期の研究も直接観察が主要部分を占めるが、前の時代よりも子どもに関係をもつ環境も主体のがわの発達も、より複雑多様となっているので、一方で連続的にのびてゆく機能とか、能力とかを継続的に観察記述するほか他方で代表的社会行動の型をとりあげて継続的に、また横断的に観察することが必要である。その結果から或る一定の法則を見出した場合も、これを子どもの発達の全体との関連において考察されなければならぬ。以上は一応、正常と考えられる環境に育つ子どもたちを対象に考えているわけであるが、子どもの発達の途中から調子

が狂ってきて、行動を不完全な段階に固着させたり、代りのものによって補償がおこなわれたりする場合がある。情緒障害や精神発達上の変異などはその病因を異常性の発生の時期、変容の過程、正常欠の発達パターンとの比較、発生前の生活史などの究明を行うことによって、社会的発達上、必要な条件を見出すことが出来るし、人格形成の機能に新しい誘因をも発見することが出来るであろう。

幼児前期の社会関係

幼児前期とは満一才から満三才の子どもの発達の区分である。一年の誕生日をむかえたばかりの子どもは、まだ赤ん坊の名残りを多分にもっているが、一五か月ともなると、ほとんどの子どもは直立の姿勢で立ち、歩行も可能になってくる。ものの操作もかなり上手になり、このような身体的成熟と運動能力の整備とは子どもを前段階とはくらべものにならないほど自由にし、活発にする。彼らは六、八か月頃の人みしりの段階を卒業し、人との接触を喜び、愛想よくなっている。彼らの社会関係の対象は、父、母、家人、隣人の他、同年令の子どもたちへその範囲はひろがり、動物や遊び道具も仲間として登場する。このような発展の基盤には先に述べた乳児期における母子関係の成立の歴史があることを見のがしてはならない。

なお、年令を重ねるに従って、子どもの生活時間は成人とすべ

時間よりも子どもといっしょに過ごす時間のほうが多くなってゆく。それ故、便宜上、他の子どもとの関係のもち方をまず、とりあげることにし、代表的社会行動として、遊びの活動を追求してみようとおもう。

I 子どもとの社会関係

(A) 子どもの遊びについて

遊びを通じて、子どもの社会行動を観察した研究はいろいろあるが、遊びの発達をとりあつたものでもっとも多く引用されているのが、Parsonsらの研究⁽¹⁾であろう。彼女は二才から五才までのナリー・スクールの一時間の自由あそびのときを利用して、短時間抽出法により、子どもの社会行動の発達を研究している。それは、一分間の子どもの行動を時間的にくわしく記録し、五分間休み、更に一分間の行動記録をとり、五分間休み、という要領で、同一児童の記録を一〇〇回、少なくとも四〇回ほどとっている。そして、彼女は記録を、年令、性などによってくわしく分析し、次のような社会的参加の形式を報告している。

(イ) まどまりのない行動 子どもは一瞬何かを見つめていたり、ほかに刺激がないときは、自分の体や衣服をもてあそんでいる。

(ロ) 傍観的行動 これは何もしないで、他の子どもたちが遊んで

いるのを見まもるような行動である。自分自身では遊びの仲間に加わらない。

(イ) 独り遊び 子どもはひとりで玩具をもて遊ぶ。他の子どもが何をしようとかまわない。

(ロ) 平行遊び 一定の場所に子どもが何人かいっしょにあつまつて遊んでいるが、おのおのは他に何の関係もたない。いっしょにそこにいるということが刺激となっただけである。

(ハ) 連合的遊び 遊具を借したり貸りたりして、他の子どもたちといっしょに遊ぶ。一種の集団活動であり、仲間に認識される活動である。

(ニ) 協同的遊び 何かを協同してつくるために組織された集団的遊びである。砂場でトンネルを協同してつくるような行動をいう。

一才から三才までの子どもは以上のべた遊びを通じて、他の子どもとどのような関係をもつてあろうか。

二才までの子どもは、外目にはほとんど何もしていないようにみうけられる。しかし、うわべにそうみえるほど、他児に対して関心がないわけではない。しばしば立ちどまって、他の子どもをみており、ちょっと、その子どもの真似をしてみせたりする。また、ときとしては、傍観的行動も、独り遊びもみうけられる。二才に近くなると他の子どもを人間としてよりは、むしろ、ものとしてあつかう。

実験的につついたり、ひっぱったり、押したり、ぶったりする。この時期は遊び道具に対する関心がよく、他の子どもに対する否定的態度は、相手に対する敵意というよりは遊具に対する関心のつよさのためである。

二才になると、独り遊びが主要な活動となる。人形遊びに興味をうばわれ、だきしめたり、たたいたり、ほおずりなど愛情を示す接触がしばしば見うけられる。他の子どもに対しても興味をもちはじめ、平行遊びがみうけられるようになる。

三か月の子どもは、人といっしょにいたがるが、その人を見つめる方法をよく知らない。この時代は道具をひたたくたり、うばったりする時で、特にこれは年下の子どもに対して激しい。少し年長の五、六才児といっしょにいるときが一番うまくいく。或る子どもは自分の家でない方がよく遊ぶ。家の中でよく遊ぶ子どもは、あたらしい場所にうまく適応できない者が多く、自分の玩具を他の子どもに使わせることを嫌う傾向がある。反対に家の外でよく遊ぶ子どもは、かなり早く適応ができる。したがって、どのような子どもとも早く仲良くなってしまう。しかし、この年令は喧嘩のもっともはげしい時代である。まだ平行遊びが優勢であるが、二、三人の子どもをふくめた協同のグループ遊びが少しずつあらわれはじめ。

三才児は、社会的遊びができる。彼らは他の子どもと遊ぶことが

好きである。よろこびいさんと、近くの友だちの家に遊びに行く。戸外の体を大きく動かすための用具や設備をつかって、二、三人で二〇分間位よくあそぶようになる。まだ、ぶつ、ける、押す、ひっかくなどの喧嘩がしばしばおこる。しかし、そのあとですぐに前よりも一層仲良く遊ぶ。この年令も五、六才の子どもを遊び仲間にする時、うまくいく、彼らの言うことをよくきくし、年長児は三才児のわがままに負けてやることのできるからである。

(B) 子どもの喧嘩について

さて以上幼児前期の子どもの遊びの発達をおいて、他の子どもに対する社会的な行動を考察したわけであるが、こうして他の子どもと接触する場合、必然生じる喧嘩にも注目する必要がある。Murphy⁽²⁾の研究によると、この時代の喧嘩は人身の攻撃からはじまった喧嘩と言うより物に対する攻撃や破壊から生じる場合が多く、一般に遊び場所や玩具が制限されているときには喧嘩の発生が多い。Craun⁽³⁾は子どもの喧嘩の発生と遊びの種類とは関係があると言って次の表のように遊戯活動と喧嘩との関係を考察している。この表によると砂遊びがもっとも喧嘩がおこり易い。遊びの約1/4は喧嘩である、男女を比較すると、男児の方が女兒よりも喧嘩が多い。それは口喧嘩ではなく、身体的な喧嘩である。一回の喧嘩の継続時間は平均三〇秒で、五分に一回位の割合でそれがおこると報告されている。喧嘩

友情と喧嘩の一要因としての行動の型

活 動 の 型	仲間との活動の%	喧嘩をふくむ%	仲間との遊びにおける喧嘩の%
1. ゴッコ遊び	93	20	21.6
2. 施設で身体的な活動をして遊ぶ	64.5	12.95	20.1
3. 破壊、おせっかい	63.5	15.8	25
4. 砂遊び	62.5	23.6	37.6
5. 静かな知的なあそび	61.5	12.5	20.4
6. 構成作業	60.5	20.2	33.6
7. 援助	55.5	11.1	20
8. 単なる身体活動	48.5	9.5	19.5
9. 玩具あそび	47.5	15.6	32.8
10. こみ入った器具の操作	42.5	9.8	23.3
11. 活動的でないあそび	33	10.8	32.8

の影響があとに残ることはない。この時代には喧嘩とはやや性質が異なるが競争が多く出現する、これは自我の形成期にあること、自

己中心的事であることに帰因する。したがってこれは望まぬ性質のものではなく、社会的不適合のそれでもない。むしろ、この時代に喧嘩をしない—できないということは決してよいことではない。彼らは喧嘩や競争することによって自分を他に関係づけ、そのことによって自分をみとめ、たしかめている。これは乳児期における攻撃的行動とよく似ている。乳児は対象との関係成立後に母親の乳首を噛んだり毛髪をひっぱったり、母親の胸をたいたりしながら、対象をたしかめ、物をける、押す、紙を破る、ベッドに手や顔をうちつけるなどの行動を通じて対象物を見出し、苦痛を感じるこ
とによって、自己の肉体を発見し、自他の関係を認識してゆく。したがってこの時代の喧嘩や競争は、自我形成の程度を示す指標でもある。喧嘩の発生は、それ自身正常な社会的行動として、指導のよい材料とすることができる。

(C) 空想上の遊び相手について

幼児前期に始まって四才か四才半頃に消滅する興味深い現象がある。それはこの頃の子どもが空想上の友だちをもつことである。

Yale 大学の児童発達クリニックにおいて学令前期の子どもたちに空想上の友だちとその関連現象についておこなった調査⁽⁴⁾がある。

彼らは両親との面接や、遊びの行動を観察した結果、二一〇名中、少なくとも二一%の子どもがある種の空想上の友だちをもっている

ことを明らかにした。これは男女児を問わず、同じ程度におこり、その半数以上がひとりっこであった。この子どもたちは、同年令の子どもと遊ぶ機会をもっているにもかかわらず、彼らとうまく交わってゆけないということは興味ぶかい事実である。

空想上の友だちをもつのは二才半頃から四才、四才半ごろで、三才ないし三才半がその次点を示す。また、子どもがかかる空想上の友だちをもつ期間は、普通六か月位つづくが、一年間かそれ以上、なかには一〇年間もひそかにこれをもちつづけたという例もある。男児よりも女児の方が空想の友だちをもつ者が多く対象も一層現実的である。(Bandier & Vogel)⁽⁵⁾

空想上の友だちには、動物をえらぶ場合もあるが、人の場合が多い。彼らはそれに太郎とか花子とかという名前をつけるか、または風変りな名前をつける。動物は犬、猫、きつね、ふくろう、小鳥、熊などがえらばれる。時には、自分の正体をかえて、動物になったりする。あそび友だちをひどくほしがっていたある女児は、家の窓から、小さな女の子が自分をのぞいているのをみた、ある子どもは遠方に移転していった仲のよい友だちと、彼を想像上の友だちとして、ながいあいだ、接触を保っていた。(Gesell)⁽⁶⁾

三才半までに、子どもの想像生活はもったつきりした型をもつようになり、子どもの活動といっそう密接に結びついてくる。四才

になると、二人またはそれ以上の子どもたちを含むもっと芝居がかった社会的あそびへと変形する。もちろん、これには個人差があつて、空想にふけらない子どももいる。Terman⁽⁷⁾は彼の広範な天才児の研究に、きわめて高い知能を有する子どもが大部分が空想上の友だちをもつと述べている。

この年令段階に、空想上の友だちをもつということは、正常な発達⁽⁸⁾の一面で、人格形成上にも意味のあることである。空想上の産物がたとえどんなものであろうと、両親は尊重してやらなくてはならない。刺激はまったく自発的に子どもの側からおこり、何か内的な要求を満足させているのである。多分一人ひとりの入りくんだ情動的発達がこのような想像という一手段を通して、子どものうちにとげられてゆくのであろう。子どもは社会的な構造に順応する能力が次第にできてくるので、このような経験を思う存分、たんのうすればいろいろの役割をとる集団あそびへと移っていくものである。

II 成人との社会関係

この時代の子どもの特徴的な社会行動である、模倣的行動と反抗的行動とに焦点をしばって、成人との社会関係をみてゆこうとおもう。

(A) 模倣について

子どもの模倣を社会的行動とみるのはどのような根拠によるのであろうか。まず、その発生と、もつともよく現られる時期の検討からはじめよう。私は先に乳児期において乳児がその対象(母親)との関係を成立した後、母親の表情や動作(音声的、視覚的に)を模倣するようになる⁽⁹⁾と記した。最初の模倣行動のあらわれとして文献に記述されたのは、音声上の模倣で、Bridg⁽¹⁰⁾は六か月頃といひ、Cald⁽¹¹⁾は九か月の問題とし、我々の日本版⁽¹²⁾標準化した検査⁽¹³⁾には一〇か月(七八%合格率)の問題とした。Cald⁽¹³⁾においても一〇か月と記され、Bridg⁽¹⁴⁾は一・七か月としている。いずれの観察も一年未満の子どもにもみる現象である。

昔の心理学者は模倣行動が先天的のものであるように考えていたが、現在では習得するものとする説が優位を占めている。Holm⁽¹⁵⁾のよう⁽¹⁶⁾に模倣を条件反射の理論的枠組で説明している者もあるが、彼によれば、模倣は心像と運動の二つの要素から成り立っていて、その心像はもっぱら外部の手本の模写で主体の要求などとは無関係である⁽¹⁷⁾と言う。しかし模倣の構造には内部にみなもとがある。これは模倣の初発的行動で明らかであつて、子どもは情緒的に結合された対象のことばや表情を「同化」しようとしている。このような内的要因が模倣による同化の素地となつているのである。すなわち子どもは外部からの印象をすべて吸収するがこの印象の上ずみだけをとるよ

うに心理的なものの形成に關係のある要素だけを自分の手もとに
つておいて、この要素を自分の活動と結合せよとする。この他
にいま一つ、模倣の成立する契機がある。何んでもよいからつか
てみたり、実行してみたりするというのである。次々に生じる行
動は試行錯誤的で模索的であるので、この行為の目的を実現させる
ための手段は、子ども自身が変化することにほかならない。そのた
めにはすべての行動をやってみる必要がある。そして行動すること
によって、自分自身を変革させてゆくのである。(Wallon)このよ
うな二つの契機はヒム模倣が成り立つので、模倣の動作自体は、手
本をそのまま表現しているように見えるが、子どもの内部にある原
型(手本を内面化したもの)の要求にしたがっているといつた方が
よい。幼い子どもの模倣は動作と動作との間に秩序というものがな
い。この動作がだんだんはつきりして、秩序があらわれてくるにし
たがって、外部の手本と客観的に比較出来るようになる。これは模
倣がもつとも盛んにあらわれる幼児前期の子どもの行動観察を通じ
て明らかである。次に私が出生から継続して観察したS児の場合を
たどってみよう。S児の模倣は八か月頃にみとめられる。その模倣
の手本はもっぱら母親と父親の表情、動作であり、動物のなき声、
物音にまでおよんだ。一三か月頃になると、父親の日常の動作を模
倣する。すなわち、煙草をすったり、煙にむせたり、マッチを吹き

けしたりする仕草をまねて喜ぶ、一八か月頃、彼はまわりの刺激に
非常に敏感である。母親が掃除する様子を見て興味をもち、それを
まねてよろこぶ。二四か月頃はますます真似が好きで、だんだんと
秩序をもってまとまった芝居があった演出となつていった。そして
三〇か月頃になるときわめて意識的な模倣になつてゆく。家事の手
伝い、父親の日曜日ごとの大工の手伝いなどの中には、目的性をも
つて一貫した行動の中にとけこんでいる。模倣を卒業して、彼自身
の行動となつていく。

成人とのかかり合ひはこの他、この時代で最も重要な意味をも
つ反抗行動においてもみられる。

(B) 反抗行動

幼児前期は反抗の時期である。この現象はいつごろ発生して、い
つごろ減少するものであろうか、欧米の文献によれば、一八か月頃
からあらわれ始め、三〇か月から三六か月が頂点で四才になれば、
おさまるといふ。故後藤岩男氏によれば、日本の子どもは約二か年
おくれであらわれるようである。これはいかなる理由によるであろ
うか。養育文化の相違に問題があるようである。(Collin⁽⁴⁾ D. S.)によ
れば、身体的反抗は年令に反比例して減少し、反対に言語による反
抗が増加する。Collinは、一八か月児はくたびれるとすぐものをひ
つつかみ、とめられるとひどく反抗するという。坐りこんで、かん

しゃくをおこし、のぞみのものを与えるか、抱きあげるかしなければおさまらない。二四か月頃になると母親を前よりよく意識し、愛情が深まる一方、新しい人や新しい場所になじみなく、母親から離れたい。所有意識がつよく、「私……ちゃんの」と自分の所有権を主張する。したがって以上のような要求が制止されるときは、かんしゃくという形で反抗があらわれる。三〇か月児は歩行と言語を獲得している。したがって、子どもは物の世界の中で、または物と関係している想念の世界の中でいろいろの事をしらべあげる。しかし、この時代は、はいといいえ、くるといく、走るととまる、つかむとはなすなど各一对の正反対の行動を支配する力がおなじ程度につりあひすぎでいて、自己の矛盾した衝動の間にはさまって調停しなければならぬことがある。子ども自身の活動体系も未成熟であるので、二つの誘因の間にはさまれて抑制がきかぬ状態にある。次の安定の時代への過渡期にあって、生活や環境が子どもにはひどくこみ入りすぎでいて、自発的に選択することがむづかしいのである。したがって、両極端の間にはさまって、固執したり、動揺したりしている。このような中にあると、子どもの要求も、依存と独立の要求の交替の時期でもある。このようなことは衣服の着がえについての子どものかんしゃくによく見うけられる。一人で着たい、着せてもらいたいという両要求に、おとながとる反対の反応

に対してかんしゃくをおこす。三六か月にもなれば、依存的要求が少なくなつてより独立的となる。どちらが好きかという選択も可能になる。この頃では家族のうちで、父と母とどちらが好きかということをよく言うのである。すなわち、この子どもたちは物質的に他人の助力からのがれ、自我の自主性を発見する。この時子どもは他人の自我に反対して立ち上るべき時期を通過しているのである。ここから自身の人格に対する一種の尊敬の念があらわれる。同時に彼らの周囲の人々の人格に対しても、注意をはらうようになる。三才児は相手の顔の表情をじつと見つめる。その表情の中から、成人の自分に対する賞讃、非難、容認、否認をみわけようとする。ただしこの場合の注目は、しばしば、周囲の人々への期待と反抗という正反対の感情を帯びている。このような、自分の人格への尊敬の念と他人の人格への注意とは、交代作用 (Walton) をおこないながら、子どもの行動の原理と様式とを刷新する発端となる。これは新しい発達の体系への出発点となる組織因でもある。

この意味で、二、三才の反抗期は、子どもの社会性発達上の重要な臨界点である。

むすび

以上、私どもは一才から三才までの子どもの社会関係の発達を、こ

の年代にあらわれる顕著な社会的行動を通して、子どもに対する反応と、成人に対する反応との両面から考察した。一才児といえ、いまだ乳児期の特徴を残した時代である。その頃から、一種の成年 (Casell)⁽¹⁹⁾としての三才児とは、同じ幼児前期の範疇でも、全く異なる存在のような印象をうける。生後三年間に、歩行と言語を獲得して、これまで遂げてきた発達の糸は輻輳して一つの焦点にあつまつた状態である。このような子どもの発達において、人格の機能の発達もまたつくられている。私は最後のむずびとして、人格機能の発達の線に、以上をまとめてみたい。

人格の機能には、はっきりとした浮彫があり、リズムがあるが、乳児期の「三か月の微笑」と「八か月の不安」と「二才児の反抗」とは三つの浮彫ををいしている。人格機能の発達は感情の機能の時期にそのみなもとを発することは前にのべたところである。感情の機能の時期は、精神生活の第一の出発点であった。人格の機能の発達は下層な生物的存在であった時の原始的な反応によって、深い影響をうけているにちがいない。感情機能の水準で主体 (乳児) と環境 (愛対象) との間にはじめて接触がおこなわれる。この接触を媒介するものが情緒であった。子どもは他人にはたらきかけ、他人からはたらきかけられおなじ場面の能動、受動という両極のあいだを往復している。いわば、母子間の「対話」とも言えよう。この段階ではい

わゆることばはいまだ存在しない。対話の先駆者——会話の古体型的な形式であって、両者の間に循環的な形式でおこなわれる動作と反応との対話である。動作にも反応にも情動がふくまれ、相互に継続する刺激的なフィードバックの回路を示す。このような循環過程は或る種の満足や欲求不満をつくり出したり、それを消滅させたりする。根拠は生きて、両者の心に記憶に止まるが、それらは後の過程において、また目標への道を開いてゆく。このような「対話」はいうまでもなく生きた対象の間におこるので、どのように精緻をつくした人形でも、乳児は「対話」することはできない。子どもが以上のような「対話」の機会をほくだつされた場合には、満一才以後、二才、三才となっても、心は外の対象にむかわず、自己的となり、行動の動機も失って、無感動となり、自己攻撃的行動が目立ってくる。精神発達も遅滞し、しいては幼児精神病疾患を呈することとなる。私の観察した一部のケースは、あまりにもこの間の事情を裏書きしている。同様の場合が *Enidom's*⁽²⁰⁾ の「愛の本性」と言われる実験にも証明されている。布と針金でつくった無生の代用母体は、小猿に、情緒的交互作用の機会を一度も与えなかった。その結果、たえられぬ不安や猛烈な憤怒の爆発のとりこになり、長じても性的関係も、何らの性的行動も示さなかった。

子どもは更に情緒的に結合された対象を通じて、ことばを学習し

ていく。いわば、言葉は思考の歩行である。ことばを得て、お互にかわし合うはなし合いは子どもになげかけられては、子どもから出てゆき、また他人へと向かう。こうして、話相手は多様になり社会的関係はいよいよ拡大されてゆく。

反抗について言えば、子どもは自分自身の独立性と、自分自身の存在を体験しようとする動機で他人にぶつかってゆく。他人と対立するということが自分をたしかめる第一歩である。かくして、また反抗することによって自他の関係を詰め、深化してゆく。そうして反抗するよりは社会的であることの方についてよい関心をもつことのできる四才児の段階へと成長してゆくのである。

付記 私は模倣と反抗とに集中して、他の協力性や同情などにおけるいとまがなかった。また、新たに生まれた同胞の存在に対する問題にもふれることができなかった。それらについては次にあげる本稿に引用した参考文献で補っていただきたい。

(東洋英和短期大学)

<引用文献>

- 1) Parten, M. B., 1932. Social Participation among preschool children. *J. Abnorm. Soc. Psychol.* 27, 243—269.
- Parten, M. B., 1933. Social play among preschool children. *J. abnorm. Soc. Psychol.* 28, 136—147.
- 2) Murphy, L. B. 1937. **Social Behavior and Child Personality**

- New York, Columbia Univ. Press, 4, 306.
- 3) Green, E. H. 1933. Group play and quarreling among preschool children. *Child Develop.* 4.
- 4) Ames, L. B. and Learned, J. Imaginary Companions and related phenomena. *J. Genet. Psychol.* 1946, 69 : 147—167.
- 5) Bender, L. & Vogel B. F. 1941. Imaginary Companion of children. *American Ortho-Psychat.* 11, 56—65
- 6) Gesell, A., Infant and Child in the Culture of Today. 邦訳者名, 「乳幼児と現代の文化」新教育協会, 1959.
- 7) Terman, L. M., 1930. *Genetic Studies of Genus.* Stanford Univ. Stanford Univ. Press, Vol. 1.
- 8) Bender & Vogel. 前出
- 9) 丹羽淑子. 乳幼児の社会的発達. 幼児の教育, 62, 7, 8.
- 10) Bihler, C. 1933a. **The Social Behavior of Children.** in *murchison, C. A. Handbook of Child Psychology*, 29 ed.^{rev}, Worcester : Clork Univ. Press.
- 11) Cattell, P. 1940, **The Measurement of Intelligence of Infants and Young Children.** Lancaster Science Press.
- 12) 古賀式乳幼児精神発達検査, 日下出版準備中
- 13) Gesell, A. 前出
- 14) Bayley, N. : 1933 Mental growth during the first three years. *Genetic Psychol. monogr.* 14, 1—92
- 15) Holt, E. B., 1931 : **Animal Drive and the Learning Process.** New York Holt,
- 16) 波多野完治「精神発達の心理学」大月書店
- 17) Catlla, R. K. 1933 : Resistant behavior of preschool children. *Child Develop.* monogr. No. 11.
- 18) 前出 16.
- 19) Gesell, A. 前出 1
- 20) 丹羽淑子, 前出 p 51.
- 21) 同上「施設乳幼児の情意の偏向に関する特殊例について」第26回日本心理学会
- 22) Harlow, F. 1959 : The Development of Affectional Patterns in Infant monkeys in **Determinants of Infant Behavior.** ed. by B. M. Foss. London methuen Co.